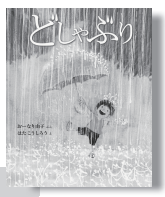
今月の
ブックトーク

雨が降ったらかさの出番！

鈴木千尋／和光小学校学校司書

毎日続く雨にうんざりしている人はいませんか？でも小さい頃、初めて長靴や傘を買ってもらった時は、雨が降るのを今か今かと楽しみに待っていたのではないでしょうか。



おーなり 由子・ぶん
はた こうしろう ・え
講談社

『**どしゃぶり**』という絵本では、ある暑い日に突然大雨が降り出します。男の子がかさを開くと「とんととんぼつんっぱらぱらぱらっ」とまるで雨が歌っているようです。激しい雨の音に「かさのたいこだぁ!」と楽しくなって、かさも放り出してずぶ濡れで遊ぶ男の子。とても気持ちよさそう。声に出して読むと、いろいろな雨の音が心地よく、うきうきしてきます。雨の日の楽しさを感じる1冊です。

では、突然の雨でかさがない時は？そう、雨やどりをしますよね。『**雨やどりはすべり台の下で**』では、スカイハイツマンションに住むいろいろな年齢の10人の子どもたちが野球をしていると、そこに1人で住んでいる雨森さんという男性が横切ります。夏なのに黒い服を着てパイプをくわえ、無口で風変わりな雨森さんが三角ベースの真ん中でかさを開いたとたん、突然雨が降り出します。まるで魔法で降らせたみたいに。子どもたちは慌てて大きなすべり台の下のトンネルに入り、雨やどりをしながら、あの人はやっぱり魔法使いなのではないか、と雨森さんとの間で起きた不思議な話をそれぞれ語り始めます。それは、マンションの扉から海に行った話、紙飛行機で空を飛んだ話など、今までは人に話していなかった体験でした。全員が話し終え雨も上がった頃、子どもたちの心にある考えが浮かびました。今夜引っ越すという雨森さんのために、ある贈り物をすることにしたのです。それは一体…？しっとりと濡らす雨のような、心温まる1冊です。

岡田 淳・作
伊勢 英子・絵
偕成社

『**はじめてのおてつだい**』の1話目「メアリーとかさの木よう日」は、かぜをひいた大おばさんのかわりにメアリーがおつかいに出かけようとした途端、雨が降ってきました。大おばさんの上等なかさは壊れて修理に出していて、かわりに手渡されたのは持ち手の部分がアヒルの頭の形をしたかさでした。飛んだり跳ねたりしたいエミリーには、かさが邪魔でしかたありません。途中で雨があがるとわざとバスや水たまりに置いて来ようとしましたが、そのたびに不思議なことが起きて、どうしても置いていけません。そのうえ、メアリーが失敗しそうになると、生きているみたいにかさが動いて助けてくれるのです。あひるの目がウインクしたり光ったりした気がして、メアリーはなんだか腹立たしく思いますが…？アヒルのかさとメアリーのコンビがとても愉快で、こんなかさがあったらいいなと思いますよ。

ジャネット マクネイル・作
松野 正子・訳
岩波書店

大おばさんはかさを修理に出していましたが、日本でも昔はかさが壊れても捨てずに直して使っていました。他にもおけを直す「たが屋」、鍋の穴を直す「いかけ屋」など、昭和30年代頃までは修理専門の職人がたくさんいたそうです。そんな職人やいろいろな道具が載っている『**昔のくらしの道具事典**』には、江戸時代に作られるようになった和がさも紹介されていて、お手入れをして大切に使っていたことが分かります。また、道具を粗末に扱うと、古道具が付喪神（つくも）という妖怪になってしまうと考えられており、唐（から）かさおばけも載っています。物を大切にしていた昔の人の思いが伝わります。雨が上がった時には、私たちもかさを日陰にそっと干して、大切にしたいですね。

小林 克，神野 善治・監修
岩崎書店

※「今月のブックトーク」「図書館のこよみ」は、全国学校図書館協議会Webサイトに掲載しています。QRコードより、PDFもご活用ください。